

水銀被害に関するオーラルヒストリー カナダ水俣病とアニシナベ先住民

森下 直紀

三重県立看護大学

カナダにおける水銀汚染は、1969年末に発見された。1962年から始まったその汚染は、カナダの主要産業の一つであるパルプ産業からのものだった。パルプの漂白に用いる塩素を製造する工程で大量の水銀が用いられ、イングリッシュ川に水銀が排出された。大陸を流れる河川の影響は広範囲に及び、少なくとも工場下流の百数十キロの河川の魚が魚食に適さない有機水銀を含有するようになった。イングリッシュ川に水銀を排出したドライデンにある国際的企業リード社の系列のドライデン化成工業の下流百キロ程にある、イングリッシュ川と接続するワビゲーン川沿岸に住む二つのアニシナベ先住民の集落、グラッシー・ナローズとヴァバシムーンは、この産業公害の影響を受けることになった。

本報告は、2017年2月22日に東京都町田市の和光大学ポプリホール鶴川で開催された和光大学地域連携研究センター主催の国際シンポジウム「カナダ・オジブエ先住民の水銀被害の歴史と現在：カナダの水俣病」の報告内容から、グラッシー・ナローズとヴァバシムーンの代表者の報告と質疑応答を、オーラルヒストリーとしてまとめ、カナダにおける水銀汚染の発覚以降のアニシナベ先住民の歴史として記録に残すものである。

グラッシー・ナローズとヴァバシムーンのアニシナベたちとの交流は、1975年に原田正純氏をはじめとする日本からの研究者がカナダに赴き、調査を行なったことから始まった。そして、水俣病患者や支援者との交流が開始され、現在も相互の交流が続いている。このシンポジウムに先立って、2017年2月18日および19日に熊本県熊本市および水俣市で開催された熊本学園大学水俣学研究センター主催の水俣病公式確認60年国際シンポジウム「カナダ先住民の水俣病と水銀汚染」が開催された。このシンポジウムも相互交流プログラムの一環として開催された。

シンポジウムに参加した、サイモン・フォビスター氏は、現地時間2019年8月5日に亡くなった。サイモン氏は、グラッシー・ナローズに最年少首長として選出され、のべ10年以上を首長として、水銀汚染問題をはじめとするアニシナベ先住民の地位回復と経済的自立に向けて尽力した。本報告が、サイモン氏の活動の一端を後世に残す一助となれば幸いである。

本稿を作成するにあたり、和光大学名誉教授ロバート・リケット氏の協力を得た。また、日本学術振興会科研費JP258709およびJP20K02121より研究助成を受けた。



シンポジウムの様子：(左から) サイモン・フォビスター首長、ルーシー・フォビスター、マービン・リー・マクドナルド

第一部 グラッシー・ナローズとヴァバシムーンからの報告

サイモン・フォビスター首長（グラッシー・ナローズ）

ここ数回のシンポジウムでは立っていましたが、最近膝の手術をしましたので、座ってお話しさせていただきます。敬愛する人々のいる美しい国に伺えて本当に光栄です。

[フォビスター首長はアニシナベ語で自己紹介し、それから英語で続ける。]¹⁾

私はグラッシー・ナローズの首長、サイモン・フォビスターです。私は「オンタリオ州北西部の」グラッシー・ナローズ・コミュニティの出身です。名前の意味は「風に乗って遠くからやってきた英雄」です。私たちの文化では嵐を恐れない。なぜなら「雷鳥は、翼の下に教を携えてやってくる」からだ。時に人生の嵐は、私たちが知恵と知識において成長するための教訓を教えてくれる。

イングリッシュ・ワビゲン川の流域にあるグラッシー・ナローズとその下流の少し離れたところのヴァバシムーン [別名ホワイト・ドッグ] という私たちの二つのコミュニティは、1960～70年代以降、嵐のような苦難に見舞われました。その苦難というのは水銀汚染の問題です。河川の水銀汚染は健康被害だけでなく、私たちの経済生活を破壊しました。というのも、観光客の釣り人を案内したり、漁業を営んだりして、魚をとることが生活の糧になっていたからです。

寄宿学校にまだ行っていない若い頃、夏の間はバーニー・ラムさんの経営するボール・レイク・ロッジ²⁾で過ごしました。当時父はそこで釣り人たちのためのガイドの仕事をして



おりました。1970年だと思いますが、ロッジが閉鎖されて、父は仕事を失うことになりました。ガイドが頼っていた魚のすべてが汚染されていたからです。ロッジの経営者だったラムさんは、ガイドたちを危険な目に合わせたくなかったので、閉店したわけです。彼は、我々のリーダーや一般住民より川の汚染実態をよく知っていました。その原因は、上流のドライデンの化学工場が10トンという凄まじい量の水銀をワビグーン川に垂れ流したことにありました^{3), 4)}。そしてまもなく、ラムさんは、オンタリオ州政府がドライデン製紙工場の稼働を認可した責任があるということで、政府を相手に損害賠償請求の訴訟を起こしたのです。そういった経緯があって、1970年にオンタリオ州政府がイングリッシュ・ワビグーン水系における漁業を禁止することによって、川に生きる私たちの大きな収入源が奪われました。

何が起きているのか私たちのほとんどは分からなかったのですが、私たちの指導者たちは少しずつ、そうした出来事が魚の水銀汚染によるものだと分かってきました。一つのきっかけはその頃、妻のルーシーの叔父さん、トマス・ストロングが若いのに、突然心臓発作で亡くなりました。[その後、遺体から高い水銀値が検出されたので]⁵⁾、多くの地域住民も工場による水銀公害が関係していると薄々気付きました。私たちはケノラ⁶⁾の裁判所へ抗議行動に出かけて、この水銀とは何か、人体にどのような影響を与えるものかという説明を要求しました。実は、そのときに一人の赤ちゃんが重い障害を持って生まれました。当然その両親はなぜ障害を持った赤ちゃんが生まれたのかを知りたがりました。その問いかけに対して返ってきたのは、地元の医者や州政府の役人の「それはアルコール中毒か、性感染症のせいだろう」という答えでした。つまり当局はその責任が親の生き方にあるという説明を持って問題をすり替えようとしたのです。

ちょうどその頃、1975年と思いますが、原田正純先生の調査団がカナダにお出でになり、そして私たちの健康状態を調べ始めたわけです。その結果は、検診を受けた人たちに水俣病、



ドライデン製紙工業に交渉に訪れたアニシナベたちと日本人支援者たち⁷⁾

つまり水銀による中毒の症状が診断されました。ですが、メディアがその結果を報じたら、オンタリオ州議員の一人は、調査団に「身勝手な旅芸人」というレッテルを貼ったのです。そして私たち若者組は刺激を受けて、先ほど森下先生が見せてくれた写真にあるように積極的に公害問題に立ち向かっていきました。

その写真の中に私はおりませんが、私の兄だとか妻の兄なども写っていました。そして私も当時若者だったから、やはり活動をやり始めました。1976年の私が21歳のとき、グラッシー・ナローズの首長に立候補して選ばれました。それで、首長として、行政当局に対して水銀問題の真実は何なのかを求めて被害者、政府関係者、原因企業などとの話し合いを提案しました。

[フォビスター首長のくしゃみ] カナダでは、「だれかに噂されるとくしゃみが出る」という諺がありますが、日本ではいかがでしょうか。そうですか。日本と一緒ですね。おそらく、今オンタリオの州政府関係者がなにか私の悪口を言っているのではないのでしょうか。[会場：笑い]

とにかく私たちは、カナダ連邦政府とオンタリオ州政府に働きかけて話し合いを行ないました。そして1978年12月15日にその合意書を取り交わすことができました。合意書は私たちのコミュニティをめぐるさまざまな問題の解決を図ったもので、その参加者のなかには原因企業やオンタリオ・ハイドロ [州設立の電力会社]⁸⁾ という電力会社もありました⁹⁾。

その後、妻と私の間には、6年間に5人の男の子が生まれまして、子育てのためにしばらくは活動を休止しなければなりません。妻は公害による健康被害に立ち向かいながら子育てもして、大変な20年を過ごしました。この場を借りて改めて感謝の意を表したいです。そしてその後政治活動に復帰し、2002年に首長として再選されました。その20年の間は、私以外のリーダー、グラッシー・ナローズ とヴァバシムーンの首長と評議員のメンバーたちは、国および州政府と交渉して和解し、いくつかの協定を締結しました。

その主たる和解協定は1985年11月に合意されました。それは、水銀障害委員会というものの設立でした。州政府が地域経済を支えてきた製紙会社を庇ったので、我々はその原因企業の法的責任を追及できなくなりましたが、その代わりに政府自体が賠償責任を負うことになったわけです。そして1986年7月に、カナダ連邦議会とオンタリオ州議会は救済措置として水銀障害委員会の制定立法案を通過させました。同委員会では8つの症状を設定して、その1つ1つをポイント化しました。8つの症状全てが認められた場合 [8ポイント] には、州政府が毎月800カナダドルという補償額を支払いますが、最低点数の4症状 [4ポイント] の場合は、200カナダドルしか支出されないという内容のものです。なお4つの症状しか認められなくても、より多くの症状の認定を求めて被害者には交渉する余地があります。ですが、結果的に水銀障害委員会から補償金を受けられた人たちはあまり多くありません。たくさんの人びとが漁業で生業を立てていましたが、漁業者でなくても皆川の魚を食べていたわけで、症状が出ています。約90%が水銀被害の症状を持っているはずですが、実際に補償金を受けた申請者は約20%に過ぎませんでした。

そして最近になって国や州政府は、やっこの水銀障害委員会の運用規定を見直し、我々に対して説明責任を十分に果たして、より多くの被害者に補償金を認めるための改定作業の議論に前向きになりました。その作業は今始まったばかりです。来日する2週間前に、州政府の首相と会合を持ち、州政府が河川から水銀を取り除くことで合意しました。いうまでもなく私たちはそれを何年も前から待ち望んでいたし、強く要求してきたことなのですが、川をきれいにしてくれるという方針転換もまた、キリスト教団体、環境グループ、労働組合や多くの市民の応援による、広く活発な支援活動の成果です。そして来週、帰国後に私はトロントに出向いて、新法案を提出する州政府の閣僚に会う予定です¹⁰⁾。

ところが、最近になって分かったことですが、川の浄化と川底に蓄積されてきた水銀の除去作業を進める上で更なる難題が出てきました。旧工場が川に垂れ流した水銀の他にも、その近辺に水銀は漏れ出ていることが分かりました。1年以上前の新聞の速報記事によると、1972年に工場の日雇い労働者が穴を掘って防水シートを貼り、その中に50~60バレルの塩と混ぜ合わされた液体水銀を不法投棄したとのこと¹¹⁾。オンタリオ州の環境・気候変動省と私たち側の科学者もその場所へ行き埋められた場所を探しています。州政府は、見つからなかったと既に発表していますが、私たちはその場所を探し続けています。

[ソア・アトキンヘッド（カナダ先住民権活動家）がコメント]

私たちと同行しているソア・アトキンヘッドさんが指摘してくださったのですが、『トロント・スター』の新聞記者二人が液体水銀を埋めた告白者の方にインタビューをして、地図の上にその捨て場をマークしてもらってから5日間かけて探し当てたそうです。ソアさんによると、科学者たちはその場所の土の水銀値が通常より4000倍以上高かったことを確認したそうです。ですがこの新たな汚染源が埋められた液体水銀によるものか、旧工場から周辺の土にしみ出たものなのかは現時点で定かではありません。

ところで、日本語通訳者の最相博子さんと私の話を補っていただけるソアさんがここにいるので大変心強いです。この場にアニシナベの通訳者がいれば、自分の母語でもう少し自由にお話が出来たのに残念です。[会場：笑い]

さて、オンタリオ州の首相を旧工場現場へ案内した時にアメリカから来た旧知の一流の科学者にも同行してもらいましたが、その時に首相が「この川は本当にきれいにできるでしょうか」と尋ねました。彼は、「他の地域ではうまくいきました。[汚染源さえ見つければ、]可能です」と答えたのです。他の例では、浄水場を設置することで、川から水銀を濾過してその毒性を中性化することに成功しているそうです。

これで私の話を終わります。私はコミュニティ・リーダーとして選ばれて、長年この問題に取り組んで来ました。そうした中、カナダだけではなく、日本にも強い味方が多くいて、私たちは大変感謝しております。特にカナダを何度も訪れていただいた原田先生と彼の率いた医師団がその道を切り開いてくださり、たくさんの研究成果も残してこられたわけです。こここのところにきてやっとなカナダ人やアメリカ人の科学者、医者もその信憑性の高い水俣研究の業績に頼るようになり、そのことから連邦政府もオンタリオ州政府も耳を傾け始めまし

た。何より大事なのは、政府関係者は水俣病が私たちのコミュニティの中に存在するという状態を認めざるをえなくなったということです。

河川を浄化することがようやく始まっているわけですが、あまり浮かれてはいけないところもあります。もし旧工場の周りの水銀汚染や川に蓄積してきた水銀を「浄化」「中性化」「封じ込め」ができて、それには相当な時間がかかります。汚染された魚が安全に食べられるようになり、漁業活動が再開するまでに長い歳月を必要とするからです。とはいえ、私たちの水俣の体験からの教訓の一つは、頑張ればその日が必ず来るという希望を持つということです。

最後に一言で締めくくりますが、私たちのコミュニティでは、3世代にわたって地域住民が水俣病を抱えてきており、それは生涯にわたる病気なので、今現在も水銀中毒に苦しみ喘いでいるし、将来においても病み苦しんでいくでしょう。水俣で起こった悲劇は、今も先住民のコミュニティ内で繰り返されています。これからもみなさんと一緒にこの戦いを成し遂げていきたいと願っています。ご清聴ありがとうございました。[会場：拍手]

ルーシー・フォビスター（グラッシー・ナローズ）

Boozhoo! [アニシナベ語で「こんにちは」] 私はグラッシー・ナローズから参りましたルーシー・フォビスターです。子どもの頃の話をしたと思います。私事ですが、それを通じて川の水系に捨てられた水銀というものが私たちの生活にどのような影響を与えてきたかということ想像していただけるかと思います。

私は子どもの時に母と一緒に魚を獲って売るという仕事に携わっておりました。その手伝いを4歳の頃から始めていました。

毎日母が釣ってきた魚を、捌いたりしていろんな形で売するための準備を手伝いました。そしてその捌いた魚は氷を入れた木箱の中に詰め込んだりしました。そしてそれを冷蔵庫のところまで持って行き、バイヤーが買いに来るまでそこに置いておきます。4歳の子供のことですから、大変な作業でした。それから数年後、私が9歳から10歳の間に、川に白い泡がブカブカ浮くようになり、なにか異変が起きていると気づきました。

兄と私は夏に川辺で遊んだり、泳いだりしていました。ある日、そのふわふわと浮いてきた白い泡を見た時、その一部を口に入れてみましたが、それが何かは分かりませんでした。そしてそれが積み上がったりして、悪臭もしました。軽く味わってみると、嫌な味だったので、母に聞きましたが、彼女にも分かりませんでした。私たちは当時、犬と猫を家で飼っていたのですが、生魚を餌にして与えていました。しばらくして特に猫に変な現象が現れてきました。歩き方がおかしくなって、猫なのにつまずいたり、そのうちに口から泡を吹き出したりするようになりました。私たちはその猫の様子を見て、魚の骨が喉に突っかったのだらうと思い、猫の口を開け中を覗きましたが、骨などが引っかかっている様子はありませんでした。そして猫は後にのたうち回ってひどく苦しんで死んでいきました。



子どもの頃の私は、脚のひどい火照りに悩まされていました。夜は痛みが特に酷かったです。私は何が起きているのかわからないから母に尋ねたのですが、母も何も分からなかった。とにかく少しでも痛みを和らげようということで、マッサージをしてくれたのですが、痛みは変わりませんでした。その頃すでに水銀の中毒ということで、いろいろなことが起きていたのですが、私たちは当時そのことについては何も知りませんでした。そして、その頃には魚が死んで川の表面にプカプカと浮かんでいるのをしばしば見るようになりました。水俣とも同じですね。

私たちは一体どうなっているかと思っていましたが、誰も水銀の話をしてくれませんでした。ですが、ある日、釣った魚をバイヤーに持って行ったら、バイヤーがもうこれ以上魚は買えないと言います。川の水に何か変なことが起きているからと説明されました。その後、ボール・レイク・ロッジが閉鎖され、観光客のための釣りガイドの仕事がなくなり、父が突然失業しました。その時点で収入の道は閉ざされたわけですから、どうやって子どもたちを養って、食べて行くかと母は悩みました。父は冬の間、罟を仕掛けて小さな動物を捕ってその皮を業者に売るといって仕事をしておりまして、なんとかそちらの方で私たちの生計を維持するという状態でした。

冬だったと思いますが、当時の首長が私たちを知らないコミュニティへ招き、そこである人物に会って欲しいと頼まれました。その人物とは行政の役人みたいな者で、ある紙切れを私たちに差し出して、それをお店に持って行けば食料品などを購入できると説明しました。それはどういうことかと言うと、社会福祉の担当者から社会福祉証明書をもって、政府の食料券で必要な買い物ができるとのことだったと思います。それがハドソンベイ・ストアまたは、ケノラの店でも使えると社会福祉の方は教えてくれました。それ以来、多くの人々が社会扶助を受けて生活しています。

水銀障害委員会が確か1986年に設置されました。同委員会は最初5人の住民に健康診断を行い、5人の毛髪が高い水銀濃度を示していることを発見しました。それにもかかわらず、一人も補償金をもらえる対象となりませんでした。その毛髪検査だけではだめで、神経内科のお医者さんたちに認定してもらわなければならないという条件だったからです。私の父は実はその5人のうちの1人でした。そして、父が補償金を受ける資格があると認定されたのは、それから30年後、今から10年前でした。父は他界してからもう2年が過ぎました。

私自身も水銀障害委員会にこれまで3回ほど申請しましたが、3度とも棄却されました。私の兄は2、3年前にやっと、その補償金を得られる対象となりました。私もめげずに来日する前に神経内科の先生にもう一度診てもらおう予約を取り付けました。さてどうなるものでしょうか。私のお話はこの辺で終わります。Miigwech [アニシナベ語で挨拶]

マーヴィン・リー・マクドナルド（ヴァバシムーン）

[アニシナベ語で挨拶]

[最相（通訳）：ソアさん、今の話を訳してくれませんか。]

ソア：アニシナベ語はそんなにできなくて全然分からなかったです。（会場：笑い）

今話したのはすべてアニシナベ語です。私の名前はリトル・ウルフと言います。カリブーという氏族の出身です。私はカナダのオンタリオ州にあるホワイト・ドッグから来ました。アニシナベ族の1人として、ホワイト・ドッグが属するヴァバシムーンの代表としてまいりました。この美しい国に来たのは初めてです。私のコミュニティの首長が長い飛行機移動には耐えられないということで、来日できなかったのですが、皆さんにくれぐれもよろしくと言っておりました。首長の代わりに来るようにと頼まれました時は、「冗談でしょ」と思いましたが、結局、今日、皆さんの前に立つことになりました。

日本に来たのが2月15日だったと思いますが、カナダと東京の時差は15時間あるので、はっきりしませんが、とにかく日本について東京で一晩か二晩いて、それから熊本へと羽田から飛んで行ったわけですが、羽田から熊本への便に乗っている途中に、末娘が私の8番目の孫を出産しました。[会場：拍手] 孫は女の子ですが、カナダに帰って初対面する時に、既に生後10日の赤ちゃんになります。

日本のいろんなところを見てからやっと水俣に辿り着きました。「水俣」とか「水俣病」という言葉は、若かった頃から耳にしていた言葉です。水俣では先生方が、水俣病の患者たちに引き合わせてくださったのですが、私たちのコミュニティでも現れている症状が、水俣のそれと同様なものであることを自分の目で確認できました。いろんな方々にお会いして、そのたびにお一人お一人と握手を交わしてまいりました。そして、食事後の懇親会では、そこに参加してくださったみなさんに、水俣の人たちと共闘し、お互いに協力し合いたいという気持ちを伝えておきました。

簡単に私たちはどういう人間なのかということをお話したいと思います。大昔から私たちの伝統的な呼び方はアニシナベですが、これまで「インディアン」とか「ネイティブ」とか「アボリジニ」や「ファースト・ネーション」と呼ばれたりして、近年だと「インディジェナス [先住という意味]」と形容されてきました。私たち自身はアニシナベ族と自称します。親の世代と同じようにヴァバシムーンで私はずっと狩猟、仕掛け罠猟や釣りなどで採れたものに頼って家族を支えてきたのですが、10年前までは夏にフィッシング・ガイドもやっていました。釣りにやって来るアメリカ人の観光客をいい魚がとれる場所へ案内したりしていました。これまでの生活は、我々の民族の培ってきた伝統的な暮らしぶりをしておりました。例えば、魚を釣ったりヘラジカを捕まえたり、[湿地に自生する] ワイルドライスを収穫することで生存してきました。

もっと昔に遡ると、私たちは広大なカナダで季節の移り変わりに従って夏と冬に移動しな



がら自由な暮らしぶりを営む狩猟収集の民族だったのですが、私たちは1873年にカナダ政府と「第三条約」なるものを交わしました。結果的にその3年後、私たちは狭い保留地に移住させられました。アニシナベ語でその土地を、*ishkoniganan*「荒地」と呼んでいます。

1900年代当初から政府が寄宿学校という制度を設立して、私たちに英語という異質な言葉を押し付けました。実はこの寄宿学校はアニシナベの子どもたちを、自らのコミュニティから引き離し、アニシナベの言葉と伝統文化を子どもたちから奪うために作られたものです。この寄宿学校がようやく閉鎖されたのが、100年後の1996年でした。

私のコミュニティにもやはり、水俣病に侵されている人々がたくさんいます。先程申しました私の末娘は、実は12歳のときにはもう水銀中毒ということで、水銀障害委員会から認定されて補償金を受け取っています。私の母も同様に補償金を受け取っています。私は1962年の生まれですが、製紙工場が水銀をワビグーン川に流し始めた年なのです。私自身は水俣病を持っていないとカナダのお医者さんに言われています。本当にそうだといいのですが、少し不安ですね。カナダに水俣から何度も行き来していただいています。数年後、次の調査団が私たちのコミュニティを訪ねることになっていると聞きました。大変感謝しております。次回調査に出来る限りお手伝いしたいと伝えておきました。私はヴァバシムーンの資源情報係を勤めていますが、今回の来日での水俣の経験を踏まえ、水銀問題に取り組んでいきたいと思えます。次回の水俣調査団のカナダ訪問を楽しみにしています。

資源情報係として私は、首長と評議会のもとで、木々、岩、水系などの天然資源と生き物の管理を担当しています。最も意欲的に取り組んでいるのは絶滅危惧種の問題です。また、子どもたちがアニシナベ族の伝統文化と言葉を取り戻すよう努力しています。先ほど話した寄宿学校に子供時代通わされたここ2～3世代のアニシナベたちは、母語や伝統文化を失いました。言語文化や伝統的な生活様式に接して広大な大地の恵みによって生きることをもう一度体験してほしいと思っています。

1970年頃、政府は漁業に警鐘を鳴らしたのですが、それが私たちの生活に大きな影響を与えました。それまでは、ほとんどの家族が魚を獲って売るという生業で、漁業と釣りのガイドという仕事は一番の収入源でした。私たちが副食として採っていたヘラジカやワイルドライスもきれいな水を必要としたので、水銀の垂れ流しは伝統的な食文化に大きな変化をもたらした。一方、政府は観光客のキャンプとスポーツ・フィッシングの再開を促しましたが、私たちは今に至っても川の魚の販売は禁じられています。それでも、私たちの家族は長年その魚を食べ続けてきましたし、これからも食べるつもりです。水銀公害の問題が日本とカナダの医療研究者の注目を引いているので、政府当局は河川から水銀を取り除いてきれいにすることになるでしょう。そうすれば、いつか私たちは安全な魚を食べることもでき、健康を害する恐れのない暮らしを営むようになるでしょう。

今日ここに至るまで、花田先生はじめ、森下先生、最首悟先生や通訳者の最相さんにもお世話になりました。このシンポジウムを企画してくださった皆さんに、そして今日ここに集い、私たちの話を聴きにきてくださった皆さまに心からの感謝の意を表したいと思

ます。[会場：拍手]

第二部 質疑応答

質問者A：カナダから来られた方々、本当に長旅お疲れ様です。まず確認したいのですが、水銀障害委員会で補償金を受け取られた人の位置づけはどのようなものでしょうか。また、その補償制度というのは、何らかの例えば法的根拠を持った制度として今成り立っているのでしょうか。そして、それは政府と企業と住民との和解ということのできた制度という理解で良いでしょうか。

サイモン・フォビスター首長：1978年12月15日に取り交わされた政府との合意書 [Memorandum of Understanding] は、連邦政府が昔から実施してきた強制移住政策に関する諸問題の解決に向けて、被害者、政府関係者、原因企業などによる話し合いの結果を確定したものです。その問題として、例えば、連邦政府が何かの都合で先住民を従来の保留地から他の保留地や収容所みたいなところへ移住させたりしたものです。もう一つのテーマは、行政側が保留地の洪水を引き起こしたという問題です。[1906年以降] オンタリオ州政府が水力発電会社 [オンタリオ・ハイドロ] という政府系企業を設立してあちこちの水系にダム建設を行ないました。それぞれのダムは多くの保留地に浸水被害をもたらしました。特に1958年に [ヴァバシムーンの] ワン・マン・レークという保留地が浸水して、家ごと何もかも流されていったという人災が起きました。その時、湖畔に位置していた墓地が浸食され、棺の一部も流されてしまいました。その後、ホワイト・ドッグの保留地に移住させられてしまいましたが、それ自体未解決の大問題です。グラッシー・ナローズも同様に浸水被害を受けましたが、私たちの場合は補償金が州政府ではなくて、水力発電会社によって支払われました。そういった事情で、オンタリオ・ハイドロが交渉のテーブルに着きました。

他にオンタリオ政府が交渉に参加させたのは、水銀を川に流したドライデン化成工業でした。ドライデン化成工業はリード社の系列会社です。そして、我々の二つのコミュニティは共同で親会社のリード製紙工業 [リード社の子会社] を相手にして賠償請求訴訟を起こして裁判で争ったのです。リード製紙工業は、1979年にドライデン製紙工業をグレイト・レイクス製紙工業に売り渡すことにしました。私たちが訴訟を起こしていたので、リード製紙工業は、法律上の定めによって私たちとの争いを企業の会計帳簿で債務として報告しなければならなかったのです。ところが州政府は、製紙工場が地域経済に必要だと考えたのです。工場の閉鎖を避けるために政府は調停者としてグレイト・レイクス製紙工業に買収計画を促しながら、被害者の賠償を引き受けることを提案しました。結局1985年に、州政府は1,670万カナダドルを補償として被害者に支給することを決めました。

リード製紙工業、グレイト・レイクス製紙工業、オンタリオ州政府の三者と私たちは、この和解を内密にして部外者の誰にも話さないことに合意しなければなりませんでした。しか

し、州政府と両会社の三者だけの密話を、内部告発者が明かしてくれました。その内容は、州政府が補償金の一部を両会社にも付与するつもりだったということです。私たちの指導者は早速、政府に対して補償金の全額がヴァバシムーンとグラッシー・ナローズに支払われるものだと主張をしました。その結果、両コミュニティに800万カナダドルずつ分けられました。州政府が、その補償金を払った理由は、オンタリオ州の水銀被害の責任を果たすためではなく、原因会社の売却を円滑に行なうためでした。その結果、私たちは裁判を取り下げることにいたしました。結局そういう形で、ドライデン製紙工業はグレイト・レイクス製紙工業に売られたわけですから、グレイト・レイクスという新しいオーナーには水銀被害の法的責任がなく、リード製紙工業とドライデン化成工業が起こした問題に対して知らん顔をしました。実質的に州政府は、リード製紙工業とグレイト・レイクス製紙工業の水銀汚染問題に対する法的責任を免除して自らそれを請け負い、両社の買収計画の実現を可能にしたわけです。

和解協定の一つとして、1986年7月に連邦・州両政府が水銀障害委員会〔とその管轄下にある水銀障害ファンド〕の設置に関する法律を制定しました。その委員会が設立された時にも、州政府は原因企業の責任を新たに免除しています。ファンドの仕組みとは、次のようなものでした。州政府はまず500万カナダドルを積み立てました。それを基に水銀障害委員会は先述のようにポイント制度に沿って水銀被害者に補償金を案分しますが、ファンドの残高が40万ドルに低下した時点で、州政府にはその総額を500万ドルの上限に戻す義務があります。現時点では、州政府はその義務を果たし続けています。水銀障害委員会は、独立した機関で、4ポイント以上の障害が認定される被害者に対して補償金を付与するという任務を持っています。例えば、先に述べたように4ポイントに相当する支払額は月に200カナダドルです。

要するに、1978年の合意書は、水銀被害だけではなくて、洪水や居留地の移転等々、さまざまな問題をめぐる和解協定を生み出したものです。これまで水銀障害委員会が繰り出した総額は2,200万カナダドルです。これは州政府が補償金として払ってきたものですが、このシステムは被害者にとって有用ではないという問題があります。例えば、先にも述べましたが、私たちの90%は子どもの頃に水銀被害を受けていますが、実際に補償金をもらう者は20%に過ぎません。そのため私は連邦・州両政府の代表者と同じテーブルに着いて、水銀障害委員会の機能改善について近く話し合うことになっています。今始まったばかりの取り組みです。実は私の隣に座っているルーシーとマーヴィンは先ほどお話にもあったように、子どものときに水銀被害を受けましたが、補償金を受けることがなかったのです。妻のルーシーは3回も申請を却下されました。私自身も検診を受けましたが、今まで水銀障害委員会に申請していません。なぜならば、同委員会の運用の在り方に疑問を持っているからです。ヴァバシムーンの方は1978年の合意書に沿って、コミュニティ全体として洪水被害の賠償金を少し受けとったかと思いますが、妥当かどうかは別の話です。グラッシー・ナローズでは、そのようなコミュニティに対する総合賠償は行われておりません。だからこそ、これから訴

訟を起こしたりして政治的にも闘う必要があります。さて長い話でした。何人かの方には眠たい時間になったかもしれません。[会場：笑い]

質問者A：2点だけ質問させてください。その基金による補償というのはヴァバシムーンとグラッシー・ナローズ以外の地域の人たちにも適応されているのか、という点と、その症状を拾う検診、医者はどうな人がやっているのかという、この2点確認させてもらっていいですか。

サイモン・フォビスター首長：一つ目の質問ですが、実はドライデン工場にあった水銀の吐口に我々より近いもう1つの犠牲になったクワイベルという小さな集落があります。クワイベルは、カナディアン・ナショナル鉄道の蒸気機関に木材、石炭、水などを提供したり、保線区内に整備労働者を供給したりしていました。その住民がワビグーン川の魚を食べていて、水銀中毒の症状が出てきました。クワイベルの代表も1978年の話し合いの場に呼ばれていたのですが、結局参加しなかったので、補償も受けられませんでした。したがって、水銀障害委員会の補償の対象になったのは、ヴァバシムーンとグラッシー・ナローズだけです。

2番目の質問ですが、実は水銀被害の検診のために、水銀障害委員会は神経内科の医者を雇っています。その医者が「コミュニティ内の」クリニックへ来て診断をするのですが、あまり信頼がおけません。日本から来られる先生のように徹底的な検査を行わないのです。足の反射作用だけを簡単に診て、それによって水銀被害があるかないかその場で決めてしまうのです。

最近、私たちのコミュニティの評議員の一人が、委員会の雇った神経内科の医者に診てもらったのですが、その医者は足をこちょこちょっとくすぐったくらいで「あなたにはなんの悪影響もないよ」と診断を下しました。評議員は、「なぜ日本の先生みたいに詳しく調べてくれないのか」と尋ねたら、その医者は怒って「もう帰りなさい。出ていきなさい」と言い放ったのです。

質問者B：このシンポジウムの題名に「オジブエ先住民」って言葉が入っていて、ご自身たちはアニシナベと名乗られています。権利の回復に関わる先住民の呼び方や地名の見直しとかかわりがあるのでしょうか。それから水銀問題に関して全体的に少し状況が良くなっていると理解してよかったのかどうか、この2点確認させてください。

ルーシー・フォビスター：オジブエというのは言語の総称です。私たちは自分たちのことをアニシナベ人という呼び方をしています。

サイモン・フォビスター首長：まず、ルーシーが指摘したように、私たちはアニシナベと自称しています。ご存知のようにカナダではさまざまな種族が存在しており、各々が固有の呼

び名を持っています。私たちの祖先は、ヨーロッパ人の到来以前にカナダとアメリカの東海岸からロッキー山脈までという広大な領土に住む大きな種族でした。

しかし、今大事なことは、私たちの権利を取り戻すことです。今日になって、私たちを「先住民族 (indigenous people)」と呼びはじめたのは、国連が2007年に採択した先住民族の権利に関する国際連合宣言のためです。私たちはその宣言を基にして、国連が保証する権利を回復する運動に取り組んでいます。しかしながら、カナダとアメリカは、もともとその宣言の採択に後ろ向きでした。両国が先住民の諸権利を認めたら、かつてヨーロッパの植民地主義が奪った領土と資源の一部を我々のコミュニティに返すことになるからでしょう。ヨーロッパ人は先住民の広大な土地を強奪し、狭い荒地からなる保留地の範囲内に拘束してきました。おとなしくそこに延々と暮らせばいいと考えています。その窮地に立たされて生きるというのは私たちの歴史的体験だし、その状態が未だに続いています。2015年にジャスティン・トルドーがカナダの首相になったその翌年、国連の先住民族の権利宣言を受け入れて国内法に組み入れると約束しましたが、いろいろな問題は山積みになっているので、具体的にどうなるかはまだ見えてきません。

最後のコメントになります。カナダ連邦政府は徐々に先住民の諸権利を認めていこうとしていますが、本格的な問題が出てきています。国連の宣言によると、先住民の領域における経済開発に関しては先住民自身が合意をしないと実現できないとなっていますが、その点でさまざまな困難が生じています。例えば、一部の種族は「このような大規模の工業化は望ましくはない」と判断しています。ところが、大手企業と政府関係者が力を合わせて開発事業を押し進めると、普通誰が勝つと思いますか。そのような難点は多々あります。

注

- 1) 括弧内および脚注は、主張を明確にするために編集者が追加したものである。
- 2) ボール・レイク・ロッジはグラッシー・ナローズの北に位置していた。グラッシー・ナローズはイングリッシュ川とワビゲーン川の合流地点にある。
- 3) ドライデン化成工業は、リード社の系列企業のドライデン製紙工業が所有する水銀陰極塩素アルカリ工場、グラッシー・ナローズの南東約130キロのワビゲーン川沿いのドライデンの町で操業していた。この工場では、隣接するリード社のパルプ・製紙工場で漂白剤として使用する塩素やその他の化学薬品を生産していた。詳細はShkilnyk, Anastasia, 1977, *A Poison Stronger than Love: The Destruction of an Ojibwa Community*, Yale Univ. Press, p.189.
- 4) カナダ政府とオンタリオ州政府は、1962年から1970年の間に20,000ポンド (10トン) の水銀が河川水系に流出したと主張したが、初期の調査報告書では流出したのは1962年から1975年の間とされていた。河川に投棄された量は政府の推定通りとされている。しかし、製造過程では40,000ポンド (20トン) の水銀が失われており、紛失した10トン水銀が適切に処理されたかどうかについては現在も明確になっていない (Shkilnyk, 同書, pp.189-91)。
- 5) トマス・ストロング (42歳) の体内には安全レベルの10倍の水銀が検出されたという。"Inquest on Indian Promised," *Globe & Mail*, December 12, 1972.
- 6) ケノラは、オンタリオ州の行政単位であるケノラ地区の州都であり、グラッシー・ナローズとヴァ

バシムーンのコミュニティが属している。ケノラはグラッシー・ナローズの南西約80キロに位置する。

- 7) 写真は伊東紀美代（ほたるの家）提供。宇井によると、撮影日は1975年9月23日。宇井純 1975 「水俣病とカナダ・インディアン——住民と住民を結ぶ旅」『展望』8、pp.57-70
- 8) 1958年、オンタリオ水力発電公社（現オンタリオ・ハイドロ社）がイングリッシュ・リバーにダムを建設した際、グラッシー・ナローズとヴァバシムーン・コミュニティが浸水した。その結果、先住民族住民は移転を余儀なくされ、伝統的な土地の一部を失った。
- 9) 覚書の第6節には、この協定で扱われる問題が簡潔にまとめられている。「解決されるべき問題は、特に以下のことに直接的または間接的に起因する、当該保留地の住民の健康、経済的、社会的、文化的、環境的福利への悪影響に関するものである：(i) 保留地に影響を及ぼす人為的な水位の上下 (ii) 保留地および非保留地の土地の浸水 (iii) 保留地および／またはその住民の移転 (iv) 保留地に影響を及ぼす環境の汚染。Cosway, Sylvia, 2001, "The Grassy Narrows and Islington Band Mercury Disability Board : A Historical Report 1986-2001," The Grassy Narrows and Islington Band Mercury Disability Board.
- 10) 2017年12月14日、オンタリオ州政府のイングリッシュ＝ワビグーン河川修復基金法が施行された。これは8,500万カナダドルの信託基金を積み立て、イングリッシュ＝ワビグーン川修復委員会によって運用される。この委員会は、グラッシー・ナローズ、ヴァバシムーン、オンタリオ州政府の代表者が構成する。水銀汚染の影響を受けている他の3つの先住民コミュニティも参加権を有している。Government of Ontario, *2019-2020 Panel Annual Report on English and Wabigoon Rivers Remediation Trust*, July 22, 2020.
- 11) このスキャンダルを暴露した作業員は、45年間沈黙を保っていたが、彼自身が健康上の問題を抱え、インターネットでグラッシー・ナローズの水銀汚染が継続的な問題であることを知り、メディアに連絡を取った。また、政府は1980年以来、イングリッシュ＝ワビグーン川の水銀検査を行っていないことを記者団に認めている。Jayme Poissons, David Bruser, "Province ignores information about possible mercury dumping ground: Star investigation," *The Star*, June 20, 2016.